

## 使徒の働き23章 「夜に、そばに立たれた主」

### 1A 最高法院での証し 1-11

1B 不当な裁判の抗議 1-5

2B 二分する議会 6-10

3B 使命の再確認 11

### 2A 危険の回避 12-22

1B ユダヤ人の陰謀 12-15

2B パウロの甥の立ち聞き 16-22

### 3A ローマ総督への引き渡し 23-35

1B 護衛による移動 23-30

2B カイサリアの留置 31-35

## 本文

使徒の働き 23 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒の働き 22 章まで来ました。今朝は、23 章を一節ずつ見ていきたいと思います。説教題は、「夜に、そばに立たれた主」です。パウロの、エルサレムへの旅において、最も落ち込んでいたであろう時に、主がそばに立って、励ましてくださいました。

22 章において、私たちは、神殿にいるユダヤ人たちに対してパウロが弁明をし、イエス様が現れくださったことを証しました。彼らは、静かにパウロの言うことをずっと聞いていたのですが、イエス様がパウロに、「22:21 行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす。」と言われたのを聞いて、彼らは、「22:22 こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」と叫びました。それで、千人隊長が兵営にパウロを引き入れました。取り調べのため鞭打ちにしようとしたのですが、パウロがローマ市民であることを話すと、パウロから身を引きました。ローマ市民には、裁判を受ける権利があり、また、むち打ちも市民に対しては違法だからです。

### 1A 最高法院での証し 1-11

それで、22 章 30 節を見てください、「翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人たちに訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を解いた。そして、祭司長たちと最高法院全体に集まるように命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。」神殿の中の秩序を保つことが千人隊長の務めでありましたが、なぜ騒動が起こっているのか、どうも彼らの宗教に関わることだろうと感じました。それで、祭司長たちと最高法院、すなわちサンヘドリンを召集させたのです。

パウロは、これで二度目の弁明をすることができます。彼は、自分に危害を与えるユダヤ人た

ちに対して、主イエスを証しました。今度は、自分自身が一議員であったサンヘドリンに連れて行かれます。ここに、かつてのパウロの同僚たちも一部にいたことでしょう。この場において、イエス様を証する機会が与えられたとパウロはみなしています。

#### 1B 不当な裁判の抗議 1-5

<sup>1</sup>パウロは、最高法院の人々を見つめて言った。「兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」

同胞のユダヤ人たちに対する呼びかけ、「兄弟たち」から始めています。そして、「あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」と言っていますが、これは今まで罪を犯したことがない、ということではなく、神の律法やユダヤ教の慣習に、自分が反することを行なっていないということです。イエスご自身が、「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っ

てはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」と言われたのに似ています。

<sup>2</sup>すると、大祭司アナニアは、パウロのそばに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。

アナニアは、紀元 47 年から 59 年に、ローマの任命によって大祭司になっています。歴史家ヨセフスは、アナニアを軽蔑すべき人間として描いているそうです。祭司たちに渡すべき什一献金を私物化したり、ローマ高官に賄賂を渡したりしました。ここでパウロを打てと命じているのは、明らかに違法です。パウロが、「健全な良心にしたがって」神の前に生きてきたと言ったので、パウロは有罪であると決めつけていたアナニアは、腹が立って打てと命じたのです。

けれども、アナニアがしたのは、彼らが裁判をする時の規定に違反しています。有罪になるまでは、無罪とみなされていました。覚えていますか、イエス様も同じ扱いを受けています。「ヨハ 18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた下役の一人が、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。」

<sup>3</sup>そこで、パウロはアナニアに向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたを打たれる。あなたは、律法にしたがって私をさばく座に着いていながら、律法に背いて私を打てと命じるのか。」

イエス様もそうでしたが、パウロもこの不当な行為に抗議しています。「白く塗った壁よ、神があなたを打たれる。」と、かなり強い言葉ですが、白いっくいのことは、イエス様もパリサイ派、律法学者に対して言われていましたね。「マタ 23:27b おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。」外側は美しく見えても、内側が汚れで一杯であることを表す時に、このような言い方をされました。律法によれば、死体に触れると汚れるので、彼らは衣をしっかりと縛って、墓に触れないようにしていました。墓であることを示

すために、白い漆喰を塗っていたのです。

パウロが、「神があなたを打たれる。」と言ったのは、自分が行ったことの報いを受けるという意味です。けれども、それは預言でもありました。アナニアは、紀元 66 年にユダヤ人たちによって暗殺されています。かなり腐敗していて、ローマに媚びていたからですが、神が打たれたからでした。

<sup>4</sup> すると、そばに立っていた者たちが「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言ったので、<sup>5</sup> パウロは答えた。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言ってはならない』と書かれています。」

パウロは、彼が大祭司であることを知りませんでした。エルサレムからずっと離れていたし、緊急の召集だったので、アンナスが大祭司の祭服を着ていなかった可能性もあります。また、彼は、宣教旅行において目が悪くなっていて、よく見えなかった可能性もあり、ガラテヤ書で「4:15 あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出して私に与えようとさえしたのです。」と語っています。

パウロが言及したのは、出エジプト記 22 章 28 節からです。「22:28 神をののしってはならない。また、あなたの民の族長をのろってはならない。」神に立てられているがゆえに、その職を敬うように命じられています。

## 2B 二分する議会 6-10

<sup>6</sup> パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見てとって、最高法院の中でこう叫んだ。「兄弟たち、私はパリサイ人です。パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」<sup>7</sup> パウロがこう言うと、パリサイ人とサドカイ人の間に論争が起こり、最高法院は二つに割れた。<sup>8</sup> サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているからである。<sup>9</sup> 騒ぎは大きくなった。そして、パリサイ派の律法学者たちが何人か立ち上がって、激しく論じ、「この人には何の悪い点も見られない。もしかしたら、霊か御使いが彼に語りかけたのかもしれない」と言った。

パウロは、最高法院のことはよく分かっていて、サドカイ派とパリサイ派がいることを見てとりました。そこで、自分がパリサイ派であることを伝えて、そこから死者の復活について語り、そしてイエス様を証しようとしたのです。すると、議会は真っ二つに分かれました。なんと、パリサイ派と律法学者たちは、「もしかしたら、霊か御使いが彼に語りかけたのかもしれない」とまで語っています。パウロがユダヤ人たちに対して弁明した時に、天からの光があったことを話し、神殿で祈っている時に主が現れたことも話しました。また、律法を重んじていることも証言していました。パリサイ派は、霊も御使いも信じていたので、これらのことが神からの啓示かもしれないとみなしたのです。ですから、パウロの「死者の復活」と言ったのは、効果的だったでしょう。けれども、意見が二つに割

れて、その論争のほうが激しくなって、パウロはそれ以上、語るができなくなりました。

<sup>10</sup> 論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと恐れた。それで兵士たちに、降りて行ってパウロを彼らの中から引っ張り出し、兵營に連れて行くように命じた。

再び、千人隊長によって物理的に引っ張り出されています。兵營に戻されました。

### 3B 使命の再確認 11

<sup>11</sup> その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。

主が、夜にパウロのそばに立っておられました。これは幻ではなく、復活の主がそばに立っておられたのです。みなさん覚えていますか、使徒の働きの中でこのように、主ご自身がそばにいてくださっているのは、すべて夜でした。夜が象徴しているように、パウロにとって途方もなくなった時、気落ちしている時でありました。一つは、トロアスにおいて、幻の中でマケドニア人が現れました。「私たちを助けてください。」と懇願しています(16:9)。この時、パウロは二度も、御霊によって行こうと思っていた地域に行けませんでした。それで、選択肢がなく、消去法で海岸の町トロアスに行ったのです。自分にとっては行き詰まりでしたが、実はそれは新たな宣教への入り口でした。そしてもう一つは、コリントにおいてです。マケドニアに来たものの、ピリピでも、テサロニケでも、迫害を受けました。ベレアに行ったら、テサロニケからパウロを殺そうと人々が追っかけてきたのです。そしてアテネに逃げましたが、わずかな者以外信ぜず、コリントでは、会堂で語ったものの、口汚く罵られたのです。その夜に、主が幻の中で、「18:9b-10 恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけません。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいません。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」彼は心が折れそうになっていたに血がありません。反対から反対です、けれども、恐れて黙ってはいけなさと、イエス様が行ってくださいました。

そしてここ、エルサレムの兵營の中です。パウロにとって、エルサレムで同胞の民に福音を語ることは、長いこと願っていたことでした。彼の心の痛みは、ロマ 9 章 2-3 節でよく表されています。「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」彼らが救われるなら、自分が呪われた者、身代わりに地獄に行く者になってもよいとまで思っていました。22 章の証しの中で、エルサレムの神殿で祈っている時に、主が現れて、「22:18 急いでエルサレムを離れなさい。わたしについてあなたがする証しを、人々は受け入れないから。」と言われて、パウロは、「22:19 主よ。この私が会堂ごとに、あなたを信じる者たちを牢に入れたり、むちで打ったりしていたのを、彼らは知っています。」と反論しました。彼らなら私の

ことが分かってきて、証しを受け入れてくれると思っていたのです。

そして今、ユダヤ人たちが自分の語ることに静かにしてくれて、聞いてくれたのです。ところが、それを語り終える前に、異邦人に遣わすというイエス様の言葉を言い出したとたんに、「この男は除いてしまえ！」という叫び声が聞こえて、それで終わってしまったのです。それから、今、サンヘドリンの中でも、死者の復活のことで訴えられていると言ったら、パウロが引き裂かれてしまうのではないと思われたほど、議論が激しくなっていました。これまでずっと願っていたことが、ここで水の泡になったのです。そして、思い出してください、パウロはエルサレムでは苦しみが待っているということが、自分自身だけでなく、エルサレムに向かう旅で会う兄弟たちも示されて、エルサレムに行かないでほしいと懇願していました。それでも、パウロは来たのです。ところが、これまで異邦人の間で神の恵みがあれだけ現れていたのに、今、同胞の民は全く心を閉ざしていました。

パウロは、後悔していたかもしれません。ユダヤ人の前の証しで、「異邦人」という言葉を使ってしまったばかりにこんなことになってしまったのではないかと大祭司に対して強い言葉を言ったのが、議会の混乱の種を蒔いてしまったのではないかと死者の復活のことで訴えられていると叫んだけれども、もっと穏やかな語らるべきではなかったか？いろいろな思いがよぎったかもしれません。みなさんには、こうした経験がおありでしょうか？「こういったことを言わなければ、こんなことにならなかったのに・・・。」という後悔です。そして、自分が最も大事にしていることを、自分自身で台無しにしてしまったのではないかとということです。

こういった時に、主がそばに立っててくださいました。私たちは、失敗したと思われる人に、遠巻きに見て、「ああ、云わんこっちゃない。」と敬遠するのではないのでしょうか。しかし、そういう時こそ、主はそばにいてくださいます。

そして、「**勇気を出しなさい。**」と言われます。勇気を失っていたからこそ、勇気を出しなさいと言われます。イエス様が何度となく、弟子たちに語られた言葉です。「16:33b 世にあっては苦難があります。しかし、**勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。**」私たちに必要なのは、自分が何が間違っていたのか、そういった分析や原因探しではなく、単に勇気を得ることです。

そして次が大事ですが、「**あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように**」と言われているところです。他の兄弟たちは、決してエルサレムに行かないようにと強く懇願していました。そして、ユダヤ人たちは全くパウロの証しを受け入れませんでした。それで、パウロがエルサレムに行ったことを、「神のみこころではなかったのに、それでもパウロは意志が固くて、それでも行った。」と言う人々もいます。私は、決してそう思いません。イエス様はここで、はっきりと、「**あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように**」と言われて、パウロの証しを認めておられるのです。

キリスト者の間で、誤ったみこころ探しがあります。それは、「うまくいかなかったら、それはみこころではない。」ということです。そう言ったことから、神のみこころはどっちなのだろうか？と推し量る傾向があります。これは大きな間違いです。神のみこころとは、神に行いなさいと命じられていることです。イエス様の証しをすることは、神のみこころです。パウロは、ユダヤ人たちに受け入れられませんでした。が、証しをしたのです！このこと自体が御心を行なったということであり、イエス様は認めておられるのです。主は、忠実であることを認めてくださるのであり、その成果を認めるのではないのです。「I コリ 4:2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」私がかかりしていた時に、友人の宣教師は、ただ召されたことに忠実であれと励ましてくれたことがあります。私たちは、うまく行かなかった時に、どうしても自分を責めてしまいます。こうすべきだった、ああすべきだったと。主が責めておられないのに、責めてしまうのです。しかし、主はそばにいて、こうやって忠実に行っていることを認めてくださるのです。

それだけでなく、「ローマでも証しをしなければならない」と言われます。パウロは元々、ローマに行かなければならないと御霊によって示されていました(19:21)。主は、今、パウロに示されていたことを確認するかのように改めて、使命を与えておられます。けれども、それもまた、今、エルサレムの兵營で拘束されていて、どうなるのかさっぱりわからない状況です。使徒の働きを読めば、最後の章、28章でようやくローマにたどり着いている姿を見ることができます。けれども、そこに至るまでに、囚人としてカイサリアに二年以上もいました。パウロがカイサルに上訴したから、ローマに移送されるものの、船は暴風に巻き込まれて、みなぎ死にかけました。そうしてローマにたどり着きます。けれども、言い換えたら、パウロはどんなことがあっても、主が命じられたことによって守られていたのです。

パウロのような経験をした人は、旧約時代にはエリヤがいます。彼が、バアルの預言者と対決して、主こそ神であることを力強く証しましたが、イゼベルの脅しによって彼はシナイ山にまで逃げました。もう死なせてくれ、と言ったほどです。そこで、地震があり、火がありましたが、そこには主がおらず、かすかな細い声によって、主が語られました。エリヤが、恐れて、こんなところに逃げていることを咎めることをせず、ただ、次の使命を彼に告げたのです。ハザエルに油を注ぎアラムの王としなさい、エリシャに油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ、と命じておられます。(I 列王 19:15-17)。新約聖書では、ペテロがいますね。彼は三度もイエス様を知らないと言いましたが、イエス様は復活後その彼に現れて下さり、「羊を飼いなさい。」と命じられました。

## **2A 危険の回避 12-22**

この励ましを受けたパウロが、これからどうなるかを見ていきましょう。

### **1B ユダヤ人の陰謀 12-15**

<sup>12</sup> 夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしない、と呪

いをかけて誓った。<sup>13</sup> この陰謀を企てた者たちは、四十人以上いた。<sup>14</sup> 彼らは祭司長たちや長老たちのところに行って、次のように言った。「私たちは、パウロを殺すまでは何も口にしない、と呪いをかけて堅く誓いました。<sup>15</sup> そこで、今あなたがたは、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに来て来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がこの近くに来る前に殺す手はずを整えています。」

なんと陰謀を企て、呪いの誓いまで立てている者たちが 40 人以上いました。ローマ兵が連れてくるのですから、その護衛兵とやり合う覚悟までしていた、つまり、死んでもパウロを殺害したいという情熱に駆られていたのです。

## 2B パウロの甥の立ち聞き 16-22

<sup>16</sup> ところが、パウロの姉妹の息子がこの待ち伏せのことを耳にしたので、兵營に来て中に入り、そのことをパウロに知らせた。

なんと、パウロには甥がいて、エルサレムに住んでいて、パウロの安否を気にしているのです。兵營の中にまで入ってきているということは、パウロにはローマ市民として比較的、緩い拘束であったことが分かります。パウロの家族については、何も書かれていませんが、書かれているのは唯一、ここです。ちなみに、サンヘドリンの一員になるには結婚していることが条件ですが、パウロは結婚していたけれども、その信仰によって妻が離れて行ったという可能性があります。けれども、この甥については信仰を持っているかどうかは分かりませんが、パウロを味方しています。

<sup>17</sup> そこで、パウロは百人隊長の一人を呼んで、「この青年を千人隊長のところに来て行ってください。何か知らせたいことがあるそうです」と言った。<sup>18</sup> 百人隊長は彼を千人隊長のもとに連れて行き、「囚人パウロが私を呼んで、この青年をあなたがたのところに来て行くように頼みました。何かあなたに話したいことがあるそうです」と言った。<sup>19</sup> すると、千人隊長は青年の手を取り、だれもないところに連れて行って、「私に知らせたいこととは何だ」と尋ねた。

この若者のただならぬ雰囲気を感じ取ったので、だれもないところにまで千人隊長は連れて行きました。

<sup>20</sup> 青年は言った。「ユダヤ人たちは、パウロについてもっと詳しく調べるふりをして、明日パウロを最高法院に連れて来るよう、あなたにお願いすることを申し合わせました。<sup>21</sup> どうか、彼らの言うことを信じないでください。彼らのうちの四十人以上の者が、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしないと呪いをかけて誓い、待ち伏せをしています。今、彼らは手はずを整えて、あなたの承諾を待っているのです。」<sup>22</sup> そこで千人隊長は、「このことを私に知らせたことは、だれにも言うな」と命じて、その青年を帰した。

このように、主は初めの危険を、回避させていただきました。パウロの甥をお用いになって、千人隊長の機転もあり、ユダヤ人の陰謀から守ってくださったのです。主は、証し人がその時までと決めておられる時まで必ず守ってくださいます。黙示録には、エルサレムで 1260 日間、預言をしつづける二人の証人の話があります。敵対する者は多かったのですが、口から火が出て焼き尽くすというすごいことを行ないます。けれども、「11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」とあります。三日半の後によみがえり、天に上ったのですが、その 1260 日間、彼らは証しをしている時に何の害も受けませんでした。私たちが、主のみこころを行っている中で、神の定めている限り、必ず災いから守られるのです。

### **3A ローマ総督への引き渡し 23-35**

#### **1B 護衛による移動 23-30**

<sup>23</sup> それから千人隊長は二人の百人隊長を呼び、「今夜九時、カイサリアに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、槍兵二百人を用意せよ」と命じた。<sup>24</sup> また、パウロを乗せて無事に総督フェリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた。

かなりの護衛ですね。そしてパウロには馬もあてがうという丁重さです。

<sup>25</sup> そして、次のような文面の手紙を書いた。<sup>26</sup> 「クラウディウス・リシア、謹んで総督フェリクス閣下にごあいさつ申し上げます。<sup>27</sup> この男がユダヤ人たちに捕らえられ、まさに殺されようとしていたときに、私は兵士たちを率いて行って彼を救い出しました。ローマ市民であることが分かったからです。

これは半分嘘ですね。取り調べのために鞭打とうとした時に、パウロがローマ市民であるといっただから彼らは手を引いたのです。ローマ市民であるから救い出したのではありません。しかし、ローマ市民であると分かってからは手厚い保護をしています。

<sup>28</sup> そして、ユダヤ人たちが彼を訴えている理由を知ろうと思い、彼を彼らの最高法院に連れて行きました。<sup>29</sup>ところが、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことが分かりました。

千人隊長も、分かってきました。初めは騒擾罪や反乱についての罪なのかと思っていましたが、だんだん、ユダヤ人の律法についての問題なのだということです。

<sup>30</sup> しかし、この者に対する陰謀があるという情報を得ましたので、私はただちに彼を閣下のもとにお送りします。なお、訴えている者たちには、彼のことを閣下の前で訴えるように命じておきました。」

陰謀について、殺されるという危険について察知したので、ローマ市民がローマ総督によって適正な裁判を受ける権利があります。またユダヤ人たちにも、総督の前で訴えるように命じました。

## 2B カイサリアの留置 31-35

<sup>31</sup> そこで、兵士たちは命じられたとおりにパウロを引き取り、夜のうちにアンティパトリスまで連れて行き、<sup>32</sup> 翌日、騎兵たちにパウロの護送を任せて、兵営に帰った。<sup>33</sup> 騎兵たちはカイサリアに到着すると、総督に手紙を手渡して、パウロを引き合わせた。

アンティパトリスは、ヘロデ大王が建てた町でエルサレムから約 60 キロ、北西にあります。今、エルサレムからカイサリアまで行くには、テルアビブとエルサレムをつなぐ国道1号線に入り、それから、西岸地区ぎりぎりのところを南北に走っている6号線に入って北上します。その途中に、「テル・アフク国立公園」があり、そこがアンティパトリスです。ここまでは山地だったので、盗賊などの危険もあるため護衛する兵士も多かったですが、ここからはシェロン平野になり、見通しがよく騎兵だけに任せました。そして、確かにカイサリアにいる総督に千人隊長からの手紙を渡しました。

<sup>34</sup> 総督は手紙を読んでから、パウロにどの州の者かと尋ね、キリキア出身であることを知って、<sup>35</sup> 「おまえを訴える者たちが来たときに、よく聞くことにしよう」と言った。そして、ヘロデの建てた官邸に彼を保護しておくように命じた。

総督はパウロの出身地を聞いていますが、そこに別の統治者がいれば、彼が裁判を優先的にします。かつて、総督ピラトがイエス様がガリラヤ出身だと知り、ヘロデの下に送ったのはそのためです。けれども、キリキア州を代表する別の統治者がいないので、総督が裁判を担当します。

そして、ヘロデの建てた官邸に保護されたとあります。今、カイサリアに行きますと、ヘロデの宮殿が、海にまで付き出た形で建てられたその遺跡が残っています。本当に建築技術の発達した優れた建物です。そこに、いくつかの監獄があったと考えられますが、おそらく、他の人たちが訪問できるような、比較的、良い環境の中にパウロは置かれたと思います。

次回、この総督、フェリクスによる裁判、そしてパウロの弁明を見ていくこととなります。フェリクスは、相当、墮落した人間だったのですが、そのためにパウロの幽閉が、無駄に二年延びることとなります。それでも、主は確実に働いておられます。ローマで必ず彼は証しするのです。しかも、そのカイサリアにいた間に、二人の総督と一人の王の前で弁明し、キリストを証しすることになります。どんな時にも、証しを立てる、御言葉を伝える、その忠実さを私たちはパウロから学ぶことができます。